

# 江戸期韻學における『音韻日月燈』

岡島昭浩

日本の寛永十年にあたる、明の崇禎六年(1633)と七年の序を持つ『音韻日月燈』は、江戸時代の韻學書において盛んに利用されている。

たとえば岡井愼吾(1915)には、

慶長以後出版の韻鏡は音韻日月燈などに引き付けてあらぬ賢らを  
加へて頗る後人を惑はしたり。

とあるし、古田東朔・築島裕(1972)でも、近世の韻鏡研究の部分で書名が擧げられている。

この『音韻日月燈』が江戸期の韻學に與えた影響はどのようなものであったのか、また、中國の音韻學史ではさほど語られることのないこの『音韻日月燈』が、日本においてなぜそのようにもてはやされたのか、といったようなことについて探りたい。

さて『音韻日月燈』は、目録類によれば國內では國立公文書館内閣文庫と國立國會圖書館に各二種、京都大學人文科學研究所、東京大學總合圖書館、東京大學文學部、早稻田大學圖書館、靜嘉堂文庫に各一種を藏する<sup>1</sup>。このうち筆者は、内閣文庫・國會圖書館・東大圖書館・京大人文研のものを見た(太田齋氏藏の零本一冊も見せていただいた)。

内閣文庫の二種のうち一種は、卷首(首之一から首之四まで)、韻母五卷、同文鐸三十卷、韻鑰二十五卷よりなる。もう一種は「韻鑰」を缺く。國會圖書館本は、一種(請求番號 227-13、以下「國會本A」)は、「韻鑰」を缺くが、もう一種(請求番號 124-14、以下「國會本B」)は、卷首・韻母・同文鐸・韻鑰がそろっている(『國會圖書館藏漢籍目録』に二種とも30巻とするのは誤り)。京大本は、韻母・韻鑰を缺き同文鐸のみ<sup>2</sup>。東大圖書館本は、やはり卷首・韻母・同文鐸・韻鑰がそろっている。東大文學部のもも『東京大學文學部中國哲學中國文學研究室藏書目録』によれば揃っているようである。早稻田のもも『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目録』によれば、首卷五卷・同文鐸三十卷・韻鑰二十五巻とあるし、靜嘉堂のもも六十巻とあるから、揃いのものであろう。

<sup>1</sup>この他、福永靜哉(1992)も指摘するように、『國書總目録』に『音韻日月燈』が収録されているが、福永氏の調査によればいずれも現存不明のようである。

<sup>2</sup>同文鐸の内題が、卷二以降は「音韻日月燈二之二」となっているのに、卷一だけは「字學正韻通二之一」となっている

『四庫全書總目提要』『小學攷』『八千種中文辭書類編提要』『中國學藝大事典』などでは韻鑑を三十五巻として全七十巻としているがこれは誤りであろう。『小學攷』にも引用する呂維祺の自序に六十巻とあり、太田嘉方『韻鏡指南鈔』も六十巻と記しているし、中國のものでも、『韻學古籍述要』(1993)に六十巻とあり、『北京人文科學研究所藏書目錄』に六十巻を載せ(別に、韻鑑のみ二十五巻という本も載せている)七十巻あるものは見当たらない。

巻首は、首之一「義例」、首之二「圖說」、首之三「音辨」(一から四まで)、首之四「採證」(「採擇音韻書目」「引證經史書目」)「訂正姓氏」「編纂姓氏」「輯次姓氏」「較閱姓氏」である。「韻母」は、平上・平下・上・去・入の五巻で、「一東、通屬合口共一百九十四字」として、「見一(古紅切)公工……見三(居雄切)弓……」という具合に列挙する。開合のある韻については、「自…至…屬開口自…至…屬合口」とする(江韻などの獨韻も開口と合口を分けている)。百六韻に分けている。「同文鐸」「韻鑑」は「韻母」の各字に説明を加えたものだが、「韻鑑」には沈約の韻と稱するものを載せている。

さて、筆者の見たもののうち、國會本Aだけが他の本と内容を異にしている。まず、「首之一」の「同文鐸 卷首一則 義例」の最後に、他の本には、

一、是刻始於壬申之秋迄癸酉冬告成。第不無繕梓之譌。甲戌春吉孺來白「下復加重訂苦心櫛比細加刪正」。余以杜門時寓目焉。凡改定二百餘條。庶幾稱善本云。中秋後三日識。

とあるのだが、國會本Aにはこれがない。國會本Aはその訂正前の姿をとどめていると思われるのである。巻頭の序文が「同文鐸序」(崇禎六年、楊文<sup>三</sup>)「同文鐸引言」(呂維祺)のみで、他の本が崇禎七年の序文、弟呂維<sup>三</sup>「日月燈序」(これにも「重加訂正」とある)、鄭<sup>三</sup>の「序」を有するのとは異なる。また崇禎六年の呂維祺「音韻日月燈序」、年號を記さない畢懋康「音韻日月燈序」も載せていない。崇禎六年冬に初版が出来、崇禎七年に改訂版が出来た、ということであろう。以下、國會本Aのような本を原形本と稱し、國會本Bのような本を改訂本と稱することにする<sup>3</sup>。

他にも、この「同文鐸 卷首一則 義例」には出入りが有るし、「同文鐸 卷首二則 圖說」でも、原形本にあった「七音清濁三十六母反切定局」「内外説」「通廣<sup>三</sup>狹説」を改訂本では削ったり、「清濁説」「開合説」を書き換えたりしている(「四等説」における「闕之」を「圈之」とするような訂正も有る)。

現在のところ筆者の目に觸れた中では原形本は「同文鐸」しか見当たらないが、「韻鑑」にも改訂前のものがあつたかと思われる。内閣文庫本の「韻鑑」の見返しに「重訂定本」とあるし、後述するように、原形本を見たと思われる太田嘉方が六十巻と記しているからである。

なお、著者の呂維祺(1587-1641)は、萬曆四十一年の進士で『明史』巻264、『明儒學案』巻54「諸儒學案下二」に傳が見える(臺灣中央圖書館編『明人

<sup>3</sup>太田氏藏の零本一冊は、呂維祺「音韻日月燈序」・畢懋康「音韻日月燈序」・呂維祺「同文鐸引言」・楊文<sup>三</sup>「同文鐸序」の後、「韻母引言」となり、韻母の五巻が続く。

傳記資料索引』(1965)p261)。著書には『四禮約言』『孝經本義』『孝經或問』『孝經名論』『存古約言』『四夷館』などがある。

東大総合図書館に、その文集『呂明德先生文集』がある(山根幸雄『日本現存/明人文集目録』(1978 増訂)に載せるのは東大東洋文化研究所のみ)。呂維祺男、呂兆<sub>三</sub>が清の康熙に編んだものである。その巻九には、音韻日月燈序・韻母引言・同文鐸引言・韻鑰引言が収められているが、それに次いで、「切法正指序」がある。この『切法正指』も『音韻日月燈』と関係する書のように、「前刻同文鐸韻鑰可互相發」とある。序を書いているのが「崇禎甲戌仲冬長至日」であり、『音韻日月燈』の改訂本の出た年に当たる。内閣文庫藏(二種とも)の『音韻日月燈』の見返しには、「切韻正法眼即出」の印が押されているが、この「切法正指」の別名であろうか。

## 内外

さて、これから『音韻日月燈』の本邦近世韻學に與えた影響を見てゆくわけであるが、まず、近世期の韻鏡の改訂の一つとして、十七轉から二十轉までの臻攝を内轉に改訂したことから始める。

大矢透『隋唐音圖』付録の「内外轉一覽表」(三宅武郎氏の手になるという)、羅常培(1933)、峯村三郎(1935)では、『音韻日月燈』刊行以前の寛永五1628年本の韻鏡で、既に臻攝を内轉に作っているように書いてあるが、これは三澤淳治郎(1960)p465にも指摘するように誤りであり<sup>4</sup>、寛文十一1671年の大田嘉方『韻鏡指南抄』が、その改訂を行った最も早い韻學書である。そしてこれは毛利貞齋『韻鏡祕訣袖中抄』(貞享二1685年)の字子(本圖は外轉に作る)、西村重慶『韻鏡求源鈔』(貞享二1685年、青森圖書館本・國會圖書館龜田文庫本)、湯淺重慶『合類韻鏡』(貞享四1687年)、盛典『韻鏡易解』(元祿四1691年)、『校正韻鏡』(元祿九1696年)、『五百字增補韻鏡』(元祿十1697年)、『歸元韻鏡』(元祿十二1699年)、『韻鏡詳解評林』(元祿十五1702年)の字子、馬場信武『韻鏡諸鈔大成』(寶永二1705年)、毛利貞齋『韻鏡袖中祕傳抄』(正徳五1715年)、岡島隆起『備考韻鏡』(享保十二1727年)、尊慧『韻鏡圖解綱目』(寛保元1741年)、文雄『磨光韻鏡』(延享元1744年)、太田全齋『漢吳音圖』(初訂本以降)等に引き継がれている(西村重慶『韻鏡求源鈔』(貞享二1685年、國會圖書館別本(請求番號107-366)、毛利貞齋『韻鏡祕訣袖中抄』の本圖(字子は内轉にする)、河野通清『韻鑑古義標註』(享保十一1726年)、『韻鏡詳解評林』の本圖、『韻鏡翼』(寛保元1741年)、『韻鏡藤氏傳』(安永五1776年)、『磨光韻鏡』の改訂本等、外轉にしているものもある。また『韻鏡詳説大全』(元祿十四1701年)、『新彫/校正韻鏡』(享保十五1730年)は第十七轉のみ内轉にしている)。

<sup>4</sup> 三根谷徹「韻鏡序例考」の注18、同『中古漢語と越南漢字音』p155にも三澤氏の指摘が載る。また、峯村三郎(1974)、勉誠社文庫『寛永五年版韻鏡』解題(鈴木眞喜男氏)、遠藤光暁(1988)、小倉肇(1992)参照

なお、『韻鏡求源鈔』には内轉にするもの（青森圖書館本・國會圖書館龜田文庫本<sup>5</sup>と、外轉にするもの（國會圖書館別本）があるが、これは刊記等は全く同じ本である。おそらく、最初は外轉にして刊行したが、同じ著者が二年後に『合類韻鏡』『韻鏡問答抄』を著した際にこれを内轉に改め、それに伴い『韻鏡求源鈔』も埋木などで内轉に改めたのであろう。

文雄は、逆に、最初内轉にしていたものを、後に外轉に改めている。これは泰山蔚『音韻斷』（寛政十 1798 年）に、

文雄、指掌・日月燈の説に惑され臻攝四轉を内轉とす。後其非を悟れるよし指要録に見ゆ。

と指摘するように、文雄は『韻鏡指要録』（安永二 1773 年）で、

予嘗て第二等文字有無の説に惑て前刻の韻鏡臻攝を内轉とせり。今按ずるに非なり。故に過を改めて通本の如く外轉とす。切韻指掌・音韻日月燈などに、唇舌牙齒喉共に第二等に字あるを外轉とし、止齒音の第二等のみ字ありて余音の第二等に字なきを内轉と名くる者は恐くは非なり（10ウ）。

としている<sup>6</sup>。

『磨光韻鏡』自體は、『正字磨光韻鏡』（安永九 1780 年）で外轉に改訂されている。この『正字磨光韻鏡』は、反切や漢音呉音唐音を記さぬものだが、従來の形式の『磨光韻鏡』は、天明七年の刊記を持つ本でも内轉になっている。安政四年の三浦道齋校訂本では外轉に作っている。また、『磨光韻鏡大全』として五冊で刊行された中の一冊目『磨光韻鏡』は、三浦道齋校訂本であり、外轉になっている。この安政四年の『磨光韻鏡』は『漢呉音圖』（初訂本以降）の影響下にあるのだが（勉誠社文庫 90 の林史典氏による解題参照）、『漢呉音圖』では、初版（前本）が「外」で、初訂本以降（中本・後本）が「内」である。これに関する説明は太田全齋はしていないようである。

さて、『韻鏡指南鈔』が内外改訂にあたって據り所とした『音韻日月燈』の記述は、

按内外之分以第二等字論也、二等別母無字、惟照二有字、謂之内、以字少拘于照之内也、二等各母俱有字、謂之外以字多出于照之外、又云第二等屬發故謂之外、三等屬收故謂之内。

というものであるが、この部分を有するのは、原形本のみである。改訂本では、四等説・清濁説・開合説があるのみで、「内外説」はない。つまり改訂本では存在しない部分なのである。太田嘉方が原形本を見たことが分かる。

竹下朋繩『音韻指掌圖』（貞享三 1686 年序）は、これを引用した上で（9オ）

<sup>5</sup> 『龜田次郎舊藏書目録』には載せていないが、第三卷に「龜田藏書」の藏書印が有る。また『帝國圖書館和古書目録』にも載っていない。ただし『國書總目録』には國會・國會龜田とある。

<sup>6</sup> 勉誠社文庫 91 の林史典氏による解題参照。また『磨光韻鏡余論』下 17 にも記事が有り、上巻の「本圖校讐」で「從第十七轉至第二十轉當作外轉」としている。

按内外説、古人制韻外義有取也。此説似不可信用者。

として斥けている。

盛典『韻鏡易解』(下之末7才「内外轉分別之事」、『新增韻鏡易解大全』にはない)は少し文章を変えて引用し、『韻鏡諸鈔大成』(卷一上33才)、『韻鏡袖中祕傳抄』(卷三10才に漢文で、卷七14ウに讀み下し文で)も、この『韻鏡易解』の文章によっている。

羅常培(1933)はこの文章を引用するが、「又云」以下を改行して記して別の箇所からの引用であるかのごとき書き方になっている。しかしこれは同一箇所にある連続した文章である。羅常培氏は、『音韻日月燈』から直接引用したのではなく、他の韻學書(あるいは日本のものか)から孫引きしたものであろう。羅常培氏は『音韻日月燈』以外の韻書からの引用では丁數等を示しているのに、『音韻日月燈』からの引用にはそれを示していないのもそれを裏付ける。峯村三郎(1935)も同様である。李新魁(1986)では、『同文鐸』からとしており、これは『音韻日月燈』の原形本を見たものと思われる。

## 開合

さて、『韻鏡指南鈔』の大田嘉方には、既に萬治三1660年に『韻鏡遮中鈔』があり、これは臻攝は外轉にしているのので、この時点ではまだ『音韻日月燈』の影響は受けていないかと思われるが、別の箇所でも『音韻日月燈』を参照したと明記してある。内外ではなく開合を決めるにあたってのことである。刊行された日本の韻學書で『音韻日月燈』を参照した最初のものと思われる<sup>7</sup>。

開合の改訂に『音韻日月燈』を参照したという『韻鏡遮中鈔』であるが、卷二「字子」の冒頭に「開口合口説、依音韻日月燈」として、第一轉と第二轉については合口である旨を注記しているものの、第三轉以降は、全く開合に関する注記がない(萬治版・寛文版ともに)。また卷三・四・五に収める韻鏡本圖については「開合」の改訂は全く行っておらず、おおむね従來の韻鏡と同じである。従來のものと思われるのは、第三十三轉を「合」に作るくらいである<sup>8</sup>。他は、第二十七轉を「開」にしているが、これは従來の韻鏡でも開にするものと合にするものの両方がある。

このように、太田嘉方は自らの言とは異なり『韻鏡遮中鈔』では開合の改訂は殆ど行っていないのであるが、後の『韻鏡指南鈔』になって本圖の改訂を行っている(『訂正韻鏡』)。その一つが第十一轉を「合」にしていることである。

<sup>7</sup>「刊行された」としたのは、寫本『韻學祕典』の成立年が未詳であるからである。元和七1621年の識語を持ち、その頃の成立とされることもある『韻學祕典』(内閣文庫藏寫本)にも『音韻日月燈』からの引用があるが、元和七年では『音韻日月燈』の刊行以前になってしまう。小西甚一(1948)、三澤諄治郎(1951)、馬淵和夫(1954)参照

<sup>8</sup>これは單なるミスではないかと思われるが、『韻鏡祕訣袖中抄』の貞享版ではこれを踏襲している

満田新造(1918)は「文雄は洪武正韻に依て此轉を合と改め」としたが、第十一轉を「合」にしたのは、『韻鏡指南鈔』に始まるのである。第十一轉を「合」には、天文十年本という先例もあるが(馬淵和夫(1954)による)「開」は誤りであると宣言して「合」としたのは太田嘉方であるということになる。その據り所は、

近世流布諸本開口呼、傳寫誤也。日月燈合口呼、惣じて開合差異多し。悉日月燈爲證。

とあるように、『音韻日月燈』である。

『音韻日月燈』は、韻圖としては「首之二圖説」に通攝・效攝・山攝(開)・山攝(合)の四枚を掲げるのみであるが、各韻について開口呼・合口呼を示すので、太田嘉方はこれによって開合を定めたのであろう。

『韻鏡遮中鈔』も、貞享四1687年の『重鐫韻鏡遮中鈔』(『鼈頭韻鏡』)になれば開合を改訂しているが、そのころには既に、毛利貞齋『韻鏡秘訣袖中抄』(但し字字のみ「合」で本圖は「開」)や湯淺重慶『合類韻鏡』も、十一轉を「合」に作っている。更に後の『韻鏡易解』『校正韻鏡』(天和版・元禄版)『韻鏡諸鈔大成』『韻鏡詳解評林』『韻鏡圖解綱目』など、多くの書で合に作るようになるのである。文雄が十一轉に「一本作開」と書いたように、文雄以前の韻學者達がすでに、「合」を採用していたのである。もし満田(1918)が書いたように、文雄が初めて「合」に訂正したのであれば、文雄は三十九轉における様に「諸本皆作開非矣」と書いたものと思われる。

この第十一轉の合は、その後、韻學界だけでなく、日本語研究にも影響を與えた。それは本居宣長『字音假字用格』(安永四1775年)の「おを所屬辨」である。これは中世以降ア行とワ行で入れ代わってしまっていたオとヲについて、オがア行であり、ヲがワ行であることを示したものであるのだが、その際、オの萬葉假名である「於」などが十一轉に屬し、この轉が『磨光韻鏡』などで合轉であるところから、これではワ行である方が都合が良くなってしまう。そこで宣長は「開合」でオヲを解くことから離れて「輕重」で解くことにするのであるが(釘貫亨(1998)を参照。また『漢吳音圖』の「第十一轉從作開本」、岡井愷吾(1915)、満田新造(1964)所收の諸論考をも参照)、實はここで宣長は『音韻日月燈』を引用している。

開口音はおのづから軽く、合口音はおのづから重し、【此輕重は韻書に云ところの者に非ず、御國の音の輕重を以て云也、音韻日月燈に、開轉所屬字其聲單而朗、故爲<sub>2</sub>之開<sub>1</sub>也、合轉所屬字其聲駢而渾、故爲<sub>2</sub>之合<sub>1</sub>也、と云る、此言御國の音の輕重によくあたれり】故に御國の輕き音の假字に用たるは皆開口音の字。重き音の假字に用たるはみな合口音の字なり。

この部分は、卷首之二「同文鐸」の「開合説」である(省略有り)。ここは『韻鏡諸鈔大成』『韻鏡袖中秘傳抄』『韻鑑古義標註補遺』も引くところであり

(『韻鏡藤氏傳』では出典を示さずに記す。『字音假字用格』以降では『音韻斷』なども引く。) 宣長が直接『音韻日月燈』を見たのかは明らかでないが、オヲの解釋に不都合をもたらす韻鏡十一轉の「合」が『音韻日月燈』によってもたらされた、というのは、宣長自身は気づいていなかったであろう。

## その他

韻鏡の内外・開合の改訂に『音韻日月燈』を使うことは、太田嘉方の『韻鏡遮中鈔』にその兆しが見え、『韻鏡指南鈔』で本格化することは既に見た通りであるが、それ以外の点においても、江戸期近世韻學書の『音韻日月燈』は、太田嘉方の引用によっている部分が多いようである。孫引きであるとまでは断定できないが、太田嘉方に導かれて『音韻日月燈』を参照しているといえるであろう。

例えば、『韻鏡易解』上之本17ウに「禱」の論が見えるが、これは『韻鏡指南鈔』上巻序例解の14オの記述によっている。

原形本にのみ見える「通廣ニ狭」も『韻鏡指南鈔』上巻7ウに見えるものだが、『新增韻鏡易解大全』(巻二12ウ) 馬場信武『韻鏡諸鈔大成』(巻三上15オ) 毛利貞齋『韻鏡袖中祕傳抄』(巻五12ウ)にそのまま使われる。

「巻首三則 音辨一」の「一字二音」から「一字十五音」までの列挙に関する言及も、『韻鏡指南鈔』以降、湯淺重慶『韻鏡問答抄』(1ウ)などに引き継がれる。

他に、次條に述べる『音韻日月燈』を信頼すべき本と位置付ける理由についても、多くの本は『韻鏡指南鈔』の記す理由をそのまま踏襲するのである。

もちろん、『韻鏡指南鈔』には引かれていない部分を引用する韻學書もある。たとえば中村 齋『韻學私言』(元禄五1692年)は、『韻表』の引用が目立つ書であるが、『音韻日月燈』をも引用していて、岡島(1986)で問題にした、アクセントを「深淺」で表す「論四聲」の條は、「論喉聲」で『音韻日月燈』巻首之三の「音辨二」を引くことに基づいているようである。

喉有淺深之分、曉匣重出爲深喉、影喻輕出爲淺喉。

と、「深淺」を「重輕」と関連付ける『音韻日月燈』を受けて、「深淺」をアクセントの高低に對應させることに到ったのでないかと思われるのである。輕が高く重が低い、という傳統的なアクセントの把握とは異なるが、「輕重」の意味はさまざまである<sup>9</sup>ところからこのような把握もありえたのであろう。

なお『音韻日月燈』のこの部分は、文雄も『韻鏡指要録』「三十六母」で参照しているが、文雄は本文を引用しておらず、「淺深」を「輕重」と関連させてもいない。

また『韻學私言』「論七音字母」の條には、

<sup>9</sup>釘貫(1998)は「融通無礙」としている。なお、木枝増一(1933)の、特に第三章で、假名遣書に見えるさまざまな「輕重」の使いようを見ることが出来る。

大唐舍利創字三十、後温首座益以孃牀幫滂微奉六母、合之爲七音

を引く。

文雄も、温首座についての記述を引用している（『韻鏡指要録』21ウ、『磨光韻鏡余論』中13）など、『音韻日月燈』からの引用が多い。文雄は『韻學私言』は見えていないと思われ、獨自に『音韻日月燈』を利用していたと思われる。温首座については『韻鏡經緯』（天明元1781年）にも引かれるなど、その後も諸書に引用される。

泰山蔚『音韻斷』は、『磨光韻鏡』を批判した書であるが、これも獨自に『音韻日月燈』を引用している。

『校正韻鏡』諸版の見返しには、「日月燈、切韻指掌等之以古本、逐一改之」という文がある。なお、『校正韻鏡』には數種あり、これらは見返しにはいずれも同じように書いてあるのだが、中身は異なっている。開合だけ見ても天和二年・元禄九年と享保十九年・寛保三年では異なっているのである。『音韻日月燈』による改訂 というものが權威付けに利用されていると見られるものである。

諸書における『音韻日月燈』の引用状況はこれぐらいにしておくが、それにしても、なぜ、『音韻日月燈』が、江戸時代の韻學において、こうまで持ち上げられたのであろうか。

『古事類苑』文學部一「音韻」に引く『槐記』には、

享保十二年七月八日。この頃唐本の新渡には、珍しき物もありと申す、日月燈など云もの、韻鏡者のうれしがるものなりと仰らる。

とある。

『韻鏡指南鈔』では、『音韻日月燈』卷首之四「採擇音韻書目」に見える49冊の書名をすべて列挙し、その多さを以て信用するに足ると言っている（中卷の第十一轉の説明）。似たような文言は『韻鏡秘訣袖中抄』（第十一轉の説明）、『韻鏡袖中秘傳抄』（同）、『新增韻鏡易解大全』（卷一「開合二位得心門」）にも見える。これに加えて、福永静哉氏も指摘する「何開奩和鈔比之乎」と同様に單純な理由といえそうだが、『新增韻鏡易解大全』卷二「開合憑切之例」には、次のような記述が見える。

古來相傳之韻鏡、別有相違開合等矣。然以音韻日月燈委改之也。此書至大明朝深切校正之珍書。以彼訂此等相違也。往古未渡彼書故韻鏡古鈔多所謬解、惜哉、雖彼書渡此土、無倭印本、先年予在京日京師寺町有某書林欲令印施之至元禄末年比雖隨分勵志不終得遂其志成就於其功、予遁退東間以降未聞令印施之否。

結局、和刻本は出版されなかったようであるが、ここに書いてある、開口呼・合口呼をはっきり示しているというのは、「韻母」「同文鐸」「韻鑰」のいずれにも各韻について記されているものである。さらに『音韻日月燈』は、「見一」「見三」「溪一」「溪三」といった具合に等位も示している。

小韻の順序を聲母に従って配列したものには『古今韻會舉要』があるが、これは等位・開合を示さない。また文雄は『磨光韻鏡』の校訂に『五音集韻』を盛んに使っていて、これは等位を示しているものの、開合については分けてあってもそれが「開合」の差であるとは記されていない。文雄や、『韻鑑古義標註』の叡龍（河野通清）は『字彙』の直横圖などを使うことによって開合や等位について理解を深めていったと思われるが、韻書の形式で開合や等位を明記してある『音韻日月燈』は便利な存在であったろう。

また『古今韻會舉要』や『五音集韻』は、『韻鏡』や『切韻指掌』『經史正音切韻指南』に見られるような反切門法について書いていないのに對し、『音韻日月燈』にはそれがあった（改訂本では省かれているが）、日本においては韻鏡を研究することが韻學の中心であったわけだが、特に反切門法をどのように解するかが、その中心であった。そうした舊來の韻學の中心である反切門法を解きつつも、開合や等位といった新しい韻學にも役立つところが、『音韻日月燈』が「韻鏡者のうれしがるものなり」という評價をうけることに繋がっていったのではないだろうか。

## 「音韻」

さて、「音韻の學」というような言い方が、現在いうような音韻學をさす言い方の源流として、字音研究學 というような意味で日本に定着したのには、『音韻日月燈』という「書物の題名が示唆を與えたことは考えられないことではない」という、釘貫亨（1997）の指摘がある。

これについては、釘貫氏が同論文の内容を語彙史研究會（1996.9）で発表された時に、筆者が質問したことと関わるものと思われるので、筆者の考えとその後の調査を補っておく。

中國において「音韻」を冠する書物は、『音韻日月燈』以前から存在するのであるが、『音韻日月燈』は、自らの書名に於いてだけでなく、内容を見ても「音韻」の使用が目につく。

『切韻指掌圖』のことを、江戸期の韻學書類で、『音韻指掌』『音韻指掌圖』と呼ぶことがある。福永氏は『韻鏡指南抄』の「予は音韻日月燈、音韻指掌の説を證と爲す」について、「嘉方は「切韻指掌圖」を「音韻指掌圖」と誤っている。」としているが（280頁）、これは『音韻日月燈』での呼び方に従っているのである。また『磨光韻鏡余論』は、

按司馬氏作指掌圖也、原應無四等差別、題曰音韻指掌、（中14ウ）

と記すが、これも『音韻日月燈』の記述を證據としている（同文鐸卷首）。このように、近世韻學書で『切韻指掌圖』が『音韻指掌（圖）』と呼びかえられることがあるのも『音韻日月燈』の影響によるものなのである<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> なお、『音韻日月燈』も、呂維祺の弟である呂維■の序では、『韻學日月燈』と書いてある。

さて「音韻」の名を冠する書物として日本の韻學書で最も早いものは、竹下朋繩『音韻指掌圖』であろう。貞享三年(1686)の序を有し、その年の内に刊行されたようであるが、元禄に重訂本が出て、更に享保にも後印本が出ている。大谷大學蔵の原刻本には題簽は残らず、享保六年の後印本の題簽には『音韻指掌/改正韻鏡』とあるが(岡島藏本)扉や凡例などには原刻本・後印本ともに『音韻指掌圖』とあるものである。

書名からは『切韻指掌圖』によっているように見えるが、韻圖の枠組みは韻鏡と似たものにして、轉圖の数も二十ではなく、二十一にしてあるなど、『切韻指掌圖』とは随分違うものになっているものである。

『音韻日月燈』との関連を言えば、凡例に、

韻畫之法、檢正字通・日月燈。

とあり、また「内外説」では『音韻日月燈』を、否定的ではあるものの引用している。さらに「三十六字母分清濁七音五行之圖」は、『音韻日月燈』の「三十六字母分清濁七音五行之圖」の體裁をそのまま使っている。ただ清濁に関しては『音韻日月燈』とは異なっている。『音韻日月燈』の「清濁」は、「清・次清・濁・清濁」が「純清・次清・半濁・全濁」と記されている。韻鏡で使われる「清濁」や、『古今韻會舉要』で使われる「次濁」ではなく、『切韻指南』で使われる「半清半濁」に近い「半濁」を使いながらも、『切韻指南』の「純清・次清・全濁・半清半濁」とは異なっていて、疑母泥母明母などを「全濁」と稱し、群母定母竝母などを「半濁」と稱しているのである。このことについて『音韻日月燈』の原形本ではさしたる説明はないが、改訂本では「指南清濁説未當」としている。清濁の對立が無聲音對有聲音では實現しない状況は、『音韻日月燈』のようなとらえ方が出て來てもおかしくはないのであるが、傳統的な等韻學の捉え方から外れて新しい捉え方をしようとした意圖が見えるものである。

竹下朋繩『音韻指掌圖』は「純清・次清・全濁・半濁」であり、體裁と用語は『音韻日月燈』によっているものの、用語の意味するところは『切韻指南』によっているのである<sup>11</sup>。

いずれにせよ、竹下朋繩『音韻指掌圖』は『音韻日月燈』の影響下に有るものであり、その題名も『音韻日月燈』に引かれたものと言えよう<sup>12</sup>。その後「音韻」を冠する書物はいくつか刊行されているが、その中の、比較的早い時期に屬する泰山蔚『音韻斷』(寛政十一 1799年)は『聲韻斷』と稱されることもあったようである。岡井慎吾『日本漢字學史』、三澤諄治郎(1951)で『聲韻斷』と書かれているし、また享和四年刊の『きき徳利』の廣告中に、『韻鏡辯惑』とならんで『聲韻斷』があるのを見たことがある(青裳堂の古書

<sup>11</sup>このように『韻鏡』の「清濁」を「半濁」と呼ぶことを、日本語音にあてはめる人も居た。このことについては岡島(未刊)参照。

<sup>12</sup>貞享二年(1685)『正字韻鏡』は竹下良繩という人の手になるものであるが、こちらは四十三轉ある韻鏡であり、「清・次清・濁・清濁」である。韻書の名もいくつか見えるが『音韻日月燈』は見えない。

目録)。どちらが本来の書名であるのかは明らかでないが、「音韻」を書名とすることへの躊躇のようなものがあったのかもしれない、とも思われる。『音韻指掌圖』が、上述のように『改正韻鏡』（「音韻指掌」は角書）を外題にして出されたことも想起される。

その後は、『音韻新書』文化元 1804 年、『音韻啓蒙』文化十三 1816 年、『音韻假字格』安政六 1859 年、『音韻假字用例』萬延元 1860 年と刊行されているが<sup>13</sup>、『音韻新書』『音韻啓蒙』などは字音に限らず、日本語音について述べることも多い<sup>14</sup>。明治の『音韻啓蒙』になるとますますそうした傾向は強まってゆくのである。

なお、釘貫氏が氣にしておられる「音韻之學」という言い方は、中國文獻では王應麟『玉海』、沈括『夢溪筆談』、『切韻指掌圖』の董南一序など、宋代の文獻に見え、「音韻之道」は『通志藝文略』に見える。

以上、江戸期韻學における『音韻日月燈』について考察してきた。

引用に際しては、濁点・句讀点などを補い、読みやすいように平假名片假名を改めた部分が有る。【】は雙行注である。

なお、当初の予定では、近世の韻鏡註釋書の開合・内外對照表を載せようと思っていた。諸書に見えるものは古版の韻鏡が中心で、後世の韻鏡註釋書は一部のものしか取り上げられておらず、韻鏡註釋書の系統關係を考えるのには、多くの韻鏡註釋書について對照することが必要なものと考えてのことである。しかし、これをうまく印刷できるような表に纏めることが出来ず、今回は見送ることにした。ご容赦願いたい。いずれ、www ページ上<sup>15</sup>にて公開することになるであろうと思う。

## 引用書目

寛永五年版韻鏡	勉誠社文庫・國會・福井大學・大谷大學
正字韻鏡（貞享二年）	個人
校正韻鏡（天和二年）	國會
校正韻鏡（元祿九年）	岡島（二部）・神宮文庫・福井大學
校正韻鏡（享保十九年）	國會・大谷
校正韻鏡（寛保三年）	京大人文研

<sup>13</sup> 『音韻授幼文選字引』は、『國書總目録』が書くような音韻の本ではなく辭書であり、また外題は「音韻授幼」を角書にした「文選字引」である。

<sup>14</sup> 杉本つとむ (1992) 參照。

<sup>15</sup> <http://kuzan.f-edu.fukui-u.ac.jp/ingaku/>

歸元韻鏡（元祿十二年）大谷大學  
五百字増補韻鏡（元祿十年）國會  
備考韻鏡（享保十二年）國會  
韻學私言（元祿五年） 九大  
韻鑑古義標註（享保十一年）岡島・九大  
韻鏡易解（元祿四年） 岡島・九大  
韻鏡求源鈔（貞享二年）國會  
韻鏡求源鈔（貞享二年）改訂本 國會・青森圖書館工藤文庫（國文學研究資料館マイクロフィルム）  
韻鏡經緯（天明元年） 國會  
韻鏡諺解（寛文十年） 國會  
韻鏡指南鈔（寛文十一年）神宮文庫  
韻鏡遮中鈔（萬治三年）國會  
韻鏡遮中鈔（寛文三年）國會・福井縣立大野高校・大谷大學  
重鑄韻鏡遮中鈔（貞享四年）岡島・岩瀬文庫（國文學研究資料館マイクロフィルム）  
韻鏡詳説大全（元祿十四年）國會  
韻鏡詳解評林（元祿十五年）岡島  
韻鏡諸抄大成（寶永二年）岡島・九大  
韻鏡圖解綱目（寛保元年）國會  
韻鏡袖中祕傳抄（正徳五年）岡島  
韻鏡藤氏傳（安永五年）岡島・大阪府立圖書館  
韻鏡祕訣袖中抄（貞享二年）國會  
韻鏡祕訣袖中抄（元祿八年）九大  
合類韻鏡・韻鏡問答抄（貞享四年）岡島・九大  
韻鏡翼（寛保元年） 靜嘉堂マイクロフィルム  
磨光韻鏡（延享元年） 勉誠社文庫  
磨光韻鏡（天明七年） 岡島  
磨光韻鏡（安政四年） 岡島  
正字磨光韻鏡（安永九年）勉誠社文庫  
大全磨光韻鏡 岡島  
韻鏡指要録（安永二年）勉誠社文庫

音韻指掌圖（貞享三年）大谷大學

音韻指掌圖（享保六年）岡島・東北大學狩野文庫

音韻斷（寛政十一年） 學習院大學付屬圖書館（國文學研究資料館マイクロフィルム）

漢吳音圖（文化十二年）勉誠社文庫・濱野知三郎校訂本

字音假字用格（安永四年）本居宣長全集

## 参考文献

- [遠藤光暁 (1988)] 三つの内外轉 『日本中國學會報』 40
- [岡井愼吾 (1915)] 字音研究史上の太田全齋翁の位置（濱野知三郎校訂 『漢吳音圖』 六合館）
- [岡島昭浩 (1986)] 元祿期における字音M尾N尾の發見 中村 齋の「韻學私言」 『文獻探究』 18
- [岡島昭浩 (未刊)] 半濁音名義考 『筑紫語學論叢』
- [小倉肇 (1992)] 韻鏡の術語 (1) 『弘前大學國語國文學』 14
- [木枝増一 (1933)] 『假名遣研究史』 贊精社
- [釘貫亨 (1997)] 日本語學史における「音韻」の問題 『名古屋大學文學部研究論集』 127(文學 43)
- [釘貫亨 (1998)] 「喉音三行弁」と近世假字遣論の展開 『國語學』 192
- [小西甚一 (1948)] 『文鏡秘府論考 研究篇上』 大八洲出版
- [杉本つとむ (1992)] 江戸期、ある 音韻論 を讀む 鳥海松亭 『音韻啓蒙』 小察 『辻村敏樹教授古稀記念/日本語史の諸問題』 明治書院
- [福永靜哉 (1992)] 『近世韻鏡研究史』 風間書房
- [古田東朔・築島裕 (1972)] 『國語學史』 東京大學出版會
- [馬淵和夫 (1954)] 『韻鏡校本と廣韻索引』 日本學術振興會
- [三澤諄治郎 (1951)] 『韻鏡諸本竝に關係書目』 自家版
- [三澤諄治郎 (1960)] 『韻鏡の研究』 韻鏡研究會
- [滿田新造 (1918)] 日本學者の韻鏡開合問題 (滿田 1964 所收)

- [滿田新造 (1964)] 『中國音韻史論考』 武藏野書院
- [峯村三郎 (1935)] 韻鏡の内外轉に就て 『藤岡博士功績記念/言語學論文集』  
岩波書店
- [峯村三郎 (1974)] 再び韻鏡の内外轉に就て 『國土館大學文學部人文學會紀要』  
6
- [李新魁 (1986)] 論内外轉 『音韻學研究』 二
- [羅常培 (1933)] 釋内外轉 『歷史語言研究所集刊』 4-2